

二〇二二年度 大学入学共通テスト 解説〈古典〉

第3問 古文 『俊頼髓脳』・『散木奇歌集』

〔出典〕

『俊頼髓脳』は、平安時代後期の歌人源俊頼（第五勅撰和歌集『金葉和歌集』の撰者）が、関白藤原忠実の依頼で、その娘勲子（後に泰子・鳥羽上皇皇后）のために作歌の手引書として著した歌論書で、和歌の効用、詠み方、秀歌の例、歌語の由来や伝承、歌人や和歌に関する説話などが収められている。入試問題としては、説話的内容の箇所が出題されることが多く、今回本文とされているのも、歌人良暹をめぐると説話的内容である。

一方、問4にある『散木奇歌集』は、源俊頼が自らの歌を撰んで編んだ私家集である。俊頼は、若い時は楽人（音楽家）として活躍した人であったが、後には堀河上皇を中心とする歌壇の中心人物となった人で、自身が撰者である『金葉和歌集』と、第七勅撰和歌集『千載和歌集』（撰者は藤原俊成）で入集歌数最多歌人となっている。歌風は、俗語を用いるなど、革新的歌風と言われる。

〔通釈〕

〔本文〕『俊頼髓脳』

宮司「『皇后に仕える役人』たちが集まって、船をどうしようか（と相談し）、紅葉をたくさん取りに行かせて、（その紅葉で）船の屋形「『船の上に設けた家の形をしたもの』」に飾り付けて、船の漕ぎ手は侍「『従者』」の若いような者を指名していたので、急いで（その者たちの）狩袴を（紅葉に合わせた色に）染めるなどしてきらびやかに準備をした。その（船遊びの）日になって、人々が、皆集まった。（高貴な方々が）「御船は準備したのか」とお尋ねになったところ、（宮司は）「すべて用意してあります」と申し上げる。そして、その時刻になって、（築島の）島陰から漕ぎ出て来たのを見ると、なになににまで、ひたすら照り輝くように磨き上げた船を二艘、飾り立てて出てきた様子は、たいそう見事なものであった。

（高貴な）人々は、皆（二艘の船に）分乗して、管絃の楽器などを、皇后様からお借りして、その楽器を担当する人々を、（船の）前方に配置して、徐々に船を動かすうちに（船は庭の南側に回り込み）、南の普賢堂で、宇治の僧正「『覚円・皇后の兄』」が、——（当時はまだ）「僧都の君」とお呼び申し上げていた時で——、（妹君のために）御修法「『加持祈禱』」をしていらっしやうたが、このようなこと「『盛大な船遊び』」があるということ、多くの僧た

ちが、長老の僧も、若い僧も、集まって、(見物しようと、普賢堂の前の)庭に並んで座っていた。(そればかりか、召し使いの)稚児や従者の法師に至るまで、花模様の刺繍のついた装束を着て、(僧たちの)後方に下がりながら、群がって座っていた。

その(僧たちの)中に、良暹という歌僧がいたのを、殿上人たちが、(以前から)見知っていたので、「(この中に)良暹がおりますか」と尋ねた。良暹が、目を細めて笑って、平伏して控えていたところ、その側に若い僧がおりましたが、(その者がこれに)気づき、「さようでございます」「良暹はおります」と申し上げたので、(殿上人は)「彼を、船に呼び寄せなさって、連歌などをさせるような趣向は、どうだろうか」と、もう一つの船に乗る人々に相談しました。すると、(人々は)「どうだろうか。(そのような卑しい者をこの船に乗せることは)あつてはならない。後世の人が、『きっとそんなことはしなくてもよかったことであるよ』と申すのではなからうか」などと言ったので、それもそうだとということ、(良暹を船には)乗せないで、「ただその場にいるままで連歌などをさせよう」などと決めて、(良暹がいる場所の)近くに船を漕ぎ寄せて、「良暹よ、この場にふさわしい連歌などを詠んで献上せよ」と、人々は申し上げなされた。すると、(良暹も)さすがの人物で、——もしかするとそのようなこともあるのではないかと思つて用意していたのだろうか——、(それを)聞いたところ、すぐに間もなく側の僧に何かものを言った。そこで、その僧が、もったいぶつて船の方に近づいて行って、

「もみぢ葉の……(屋形の)紅葉が焦がれ」「焦げるように色づき」、漕がれて行くのが見える(素晴らしい)御船であるよ。

と申しております」と申しあげて、(もといた場所に)戻った。

人々は、これを聞いて、各船に知らせて、付句を詠もうとしたが(詠むことができず)遅かったので、船を漕ぐともなく(流して)、少しずつ築島(の周囲)を廻つて、一周するあいだに、句を付けて言おうとしたが、(それでも)付られなかったので、何もしないままむなしく(その一周も)過ぎてしまった。「どうした」「遅いぞ」と、互いに船同士言い争つて、二周になってしまった。それでもなお、付けられなかったので、船を漕がずに、島の陰で、「どう考えてもよくないことだ、この連歌を今もつて付けられないでいるのは。日はすっかり暮れてしまった。どうしよう」と、今はもう、付句を詠もうという気もなくなつて、付けられずにそれきりになつてしまふようなことを嘆くうちに、(呆然として)何も考えられなくなつてしまった。

大げさに管絃の楽器を皇后からお借りして船に乗せていたのも、少しもかき鳴らす人もなく、弾かないままになつてしまった。このように(皆で)あれこれ言っているうちに、普賢堂の前に大勢集まっていた人々も、皆立ち去つてしまった。人々は、船から降りて(皇后の)御前で管絃の遊びをしようなどと思つていたけれど、このことが思うようになかなかつたこと、(興もさめて)、皆逃げるようにそれぞれ立ち去つてしまった。宮司は、(いろいろと催しの)準備をしていたけれど、(すべて)無駄になつて(予定通りに進めることもなく)それきりになつてしまった。

【問4 引用文】 『散木奇歌集』

人々が大勢、八幡の御神楽「石清水八幡宮における歌舞の催し」に参上した折に、催しが終わつて、その翌日、別当法印「石清水八幡宮の長官」で

ある光清のお堂の池の釣殿「池に突き出るように建てられている建物」に人々が並び座って宴をした時に、(光清が)「私は、連歌「短歌の上句と下句を別々に詠み合う文芸」を作ることがわかったように思われます。たった今、連歌(の付句)を付けたい」などと申しまして座っていたので、型どおりにということ(我が子息俊重が)申しました句は、

釣殿の〓：釣殿の下には魚は住んでいないのだろうか。 俊重

光清はしきりに(付句を)考えられども、付けることができなくてそれきりになってしまったことなどを、(俊重が)帰ってきて語ったので、ために(私が付けてみよう)ということ(私俊頼が詠んだ句は)、

うつばりの〓：(釣殿の)うつばり「屋根を支える梁」ではないが、釣針の姿が水底に映って見え隠れする(からね)。 俊頼

〔解説〕

問1 語句解釈の問題

重要単語・重要文法を確認し、必要に応じて前後の文意も踏まえて解答したい。

短い語句の意味を問う設問は、「センター試験」時代には毎年度問1で出題されてきたもので、「大学入学共通テスト」(以下、「共通テスト」)になってもひき続き出題されている。

(ア) 標準

「やうやうさしはす程に」の解釈として最も適当なものを選べ。

「やうやう／さしはす／程／に」と単語分けされる。

「やうやう」は、「徐々に・段々・次第に・少しずつ」などと訳す副詞。これが正しいのは、③・④・⑤。「さしはす」は、必修単語ではないが、本文1行目の「船さし」の(注)に「船を操作する人」とあるので、「さし」は「船を操作する」の意で、「さしはす」で、〈船を操作して、築島の周囲を廻らせる〉ことと考えたい。ちなみに、1行目の「若からむをさしたりけれ」の「さし」は「指名する」の意の「指し」、7行目の「さし退きつつ」の「さし」は接頭語(語調を整える程度の意味しかない)で、「船を操作する」の意ではない。いずれにせよ、④の「船の方に集まる」、⑤の「演奏が始まる」の意を「さしはす」の部分に読み取ることはできないから、これで正解は③に決定する。

よって、正解は③である。

正解 21 ③

(イ) 標準

「ことごとしく歩みよりて」の解釈として最も適当なものを選べ。

「ことごとしく／歩みより／て」と単語分けされる。

「歩みよりて」については、いずれの選択肢も大きく間違っていないが、「その僧」、つまり、良暹が詠んだ句を聞いた「かたはらの僧」が、誰（どこ）に「歩みよ」ったのかを考えると、「連歌などして参らせよ」と命じた「人々」の方へであるから、これを「僧侶たちの方に」としている①、「良暹のそばに」としている③、「良暹のところ」に」としている⑤は正しくない。また、「ことごとしく」は、「大げさだ・大仰だ・仰々しい」などと訳す形容詞「ことごとし」の連用形。そのままの訳語は選択肢にないが、④の「もったいぶって」は「いかにも仰々しく振る舞って・重々しく扱って」という意味であるから、これで正解は④に決定する。

よって、正解は④である。

正解 22 ④

(ウ) 基礎

「かへすがへすも」の解釈として最も適当なものを選べ。

「かへすがへす／も」と単語分けされる。

「かへすがへす」は、本来は、そのまま「繰り返し繰り返し・何度も何度も」の意であるから、①「繰り返すのも」がよいように見えるが、現在でも「かへすがへすも残念だ」のように使う「何度考えてみても・どう考えても」の意を表す用法も、古くから、「かへすがへす本意なくこそ覚え侍れ（＝どう考えても不本意に思われます）」（『竹取物語』）のようにあり、さらにその意味の意識といえる「本当に・まったく」と訳すべき用例も「かへ

すがへす感ぜさせ給ひけるとぞ（＝本当に感動なさったと言うことだ）（『徒然草』）のようにある。傍線部は、直後に「わるきことなり、これを今まで付けぬは（＝よくないことだ、この連歌を今もって付けられないでいるのは）」とあり、この意味にスムーズにつながる「かへすがへす」の訳語は「どう考えても」や「本当に」である。①の「繰り返すのも」では文脈に当てはまらない。選択肢で、「かへすがへす」の訳が正しく、その訳が文脈にも当てはまるのは②である。なお、③の「句を返す」、④の「引き返す」、⑤の「話し合う」は、「かへすがへす」の訳として正しくなく、これらは文意も通らない。

よって、正解は②である。

正解 23 ②

問2 波線部（五箇所）の語句・表現に関する説明問題 標準

波線部 a～e について、語句と表現に関する説明として最も適当なものを選び。

傍線部に関して、語句・表現・内容等、多方面から問う問題で、「共通テスト」になって出題されるようになった新傾向の問題。これまでは一箇所の長い傍線部について問われていたが、本年度は五箇所について問われている。また、全ての選択肢で文法・敬語について問われたのも、「共通テスト」になって始めてのことである。

① 波線部 a は「若から／む」と単語分けされ、「若いような」と直訳される。

「若から」は、形容詞「若し」の未然形。「む」は、婉曲（＝ような）の助動詞「む」の連体形である。助動詞「む」は、連体形の時には、多くの場合に婉曲を示す。婉曲であるから、「断定的に記述する事を避けた表現」という説明は正しいが、「らむ」を現在推量の助動詞であるとしている説明は正しくない。

② 波線部 b は「さ／に／侍り」と単語分けされ、「そうでございます」と直訳される。

「さ」は、「そう・そのように」の意の副詞。「に」は、断定（＝～だ）の助動詞「なり」の連用形。「侍り」は、「～です・～ます・～ございます」などと訳す、丁寧の補助動詞である。丁寧語は、それを話している人（話し手）から、その話を聞いている人（聞き手）に対する敬意を示す敬語であ

る。波線部は、「殿上人」から「良暹はいるか」と尋ねられて、良暹の代わりに、側にいた「若き僧」が、「そうです（＝おります）」と答えているのであるから、この「侍り」には、話し手「若き僧」から、聞き手「殿上人」への敬意があることになる。よって、「侍り」が「読み手（＝読者）への敬意」を示しているとしている説明は正しくない。

③ 波線部③は「まうけ／たり／ける／に／や」と単語分けされ、「用意していたのであろうか」と直訳される。

「まうけ」は、「用意する・準備する」などと訳す動詞「まうく（設く）」の連用形。「たり」は、存続（＝くっている）の助動詞「たり」の連用形。「ける」は、過去（＝くた）の助動詞「けり」の連体形。「にや」は、断定（＝くだ）の助動詞「なり」の連用形「に」に、疑問の係助詞「や」が接続し、「や」による係り結びの結び「あらむ」などが省略されている状態。結びを補うと「くにやあらむ」となり、「くであるだろうか」などと訳す表現であることになる。

このように、文中に「く、——にや、く」という状態がある場合、「——にや、」の箇所は挿入句となっており、作者や語り手の想像が挟み込まれている場合がある。ここも、本来「良暹、さりぬべからむ連歌などして参らせよ」と、人々申されれば、さる者にて、◆聞きけるままに程もなくかたはらの僧にもを言ひければ（＝要約「良暹よ、適当な連歌を詠め」と人々が言ったところ、良暹もさすがの人で、それを聞いてすぐに側の僧に何か言った）（波線部の前後）と続く文の途中（◆の箇所）で、そのように素早く良暹が反応できたことについて、作者が「もしさやうのことやあるとて、まうけたりけるにや（＝もしかするとそのようなこともあるのではないかと思って、用意していたのだろうか）」と感想を述べているのである。よって、③は、「や」の説明も、「文中に作者の想像を挟み込んだ表現になっている」という挿入句の説明も正しい。

④ 波線部④は「今／まで／付け／ぬ／は」と単語分けされ、「今まで付けないことは」と直訳される。

「付け」は、ここでは連歌の付句（つけく）を詠んで付けることを意味する、下二段活用動詞「付く」の未然形か、連用形。「付け」が未然形の場合には、直後の「ぬ」は、未然形に接続する、打消の助動詞「ず」の連体形ということになり、「付け」が連用形の場合には、直後の「ぬ」は、連用形に接続する、完了（＝くってしまう・くた）・強意（＝きつと・必ず）の助動詞「ぬ」の終止形ということになるが、もし「ぬ」が終止形であれば、「ぬ」の直後で文が終わっているとか、直後に終止形に接続する助動詞があるはずである。しかし、ここはそうようになっていないから、助動詞「ぬ」の終止形ではなく、助動詞「ず」の連体形であることになる。「ぬ」が連体形であるから、「今まで付けないことは」のように、「ぬ」の後に「こと」などの体言を補って訳すことができるのである。

よって、「ぬ」を「強意の助動詞」とし、「『人々』の驚きを強調した表現になっている」と説明しているのは正しくない。

⑤ 波線部⑤は「覚え／ず／なり／ぬ」と単語分けされ、「（何も）思われなくなりました」と直訳される。

「覚え」は、「（自然と）思われる・感じる」と訳すことが多い動詞「覚ゆ」の未然形。「ず」は、打消の助動詞「ず」の連用形（本活用）。「なり」は、

動詞「なる（成る）」の連用形。「ぬ」は、連用形に接続しているので、完了（し・しまし・た）の助動詞「ぬ」の終止形である。

打消の助動詞「ず」に、様々な「なり」が接続する場合については、その接続の仕方を確認しておかなくてはならない。

・動詞「行く」に、打消の助動詞「ず」が接続し、さらに、断定（し・す・である）の助動詞「なり」が接続する場合

断定の助動詞「なり」は本活用の連体形に接続するので、「行かぬなり（行かないのだ）」となる。活用に本活用と補助活用がある語に助動

詞が接続する場合、ほとんどの助動詞は補助活用に接続するが、断定の助動詞「なり」だけは本活用の連体形に接続するのである。

・動詞「行く」に、打消の助動詞「ず」が接続し、さらに、伝聞（し・そうだ）・推定（し・ようだ）の助動詞「なり」が接続する場合

伝聞・推定の助動詞「なり」は補助活用の連体形に接続するので、「行かざるなり（行かないそうだ・行かないようだ）」となる。伝聞・推

定の助動詞「なり」は、主に終止形に接続するが、活用に本活用と補助活用がある語に接続する場合は、補助活用の連体形に接続するのである。

・動詞「行く」に、打消の助動詞「ず」が接続し、さらに、動詞「なる（成る）」の連用形「なり（成り）」が接続する場合

動詞は用言であるので、活用に本活用と補助活用がある語に接続する場合は、本活用の連用形（用言に連なる形）に接続するので、「行かず

なり（行かなくなり）」となる。

よって、「なり」を「推定の助動詞」とし、「今後の成り行きを読み手に予想させる表現」とであると説明しているのは正しくない。

以上から、正解は③である。

正解 24 ③

問3 内容説明問題 標準

1 3 段落についての説明として最も適当なものを選び。

広い範囲に関する説明問題（合致問題）は、毎年度出題されている問題である。

① 「当日になってようやく」が誤り。本文2行目に「その日（船遊びの当日）になりて」とあることからすると、その前に書かれている船の準備に関する記述は、「当日」を迎えるより前に行われたことであるとわかる。

② 「呼び集めた」が本文になく、「時間が迫ってきたので、祈禱を中止し」もはっきりとは書かれてはいない。このことは、本文6～7行目「南の普賢堂に群がれるたり」に相当しそうだが、ここには、「普賢堂で、宇治の僧正が加持祈禱をしていたが、盛大な船遊びがあるということで、多くの僧やその従者たちが庭に群がって座っていた」（要約）と書かれているだけである。

③ 「辞退した」が誤りで、「句を求められたことには喜びを感じていた」もはっきりとは書かれてはいない。第3段落で、船に乗っていた殿上人が「あれ、船に召して乗せて連歌などさせせむは、いかがあるべき（＝あの良暹を、船に呼び乗せなさって、連歌などをさせるような趣向は、どうだろうか）」と提案した時、もう一つの船に乗っていた人々が「あるべからず。後の人や、さらでもありぬべかりけることかなとや申さむ（＝あつてはならない。後世の人が、『きつとそんなことはしなくてもよかつたことであるよ』と申すのではなからうか）」と反対したので、「乗せず（＝良暹を船に乗せない）」ことになったのである。この反対した理由は、③が言うように「（良暹の）身分が低いため」と考えることはできそうではあるが、良暹が船に乗ることを「辞退した」のではない。また、殿上人が「良暹がさぶらふか（＝良暹がおりますか）」（第3段落1行目）と言った時、良暹は「目もなく笑みて（＝目を細めて笑って）」はいるが、「さりぬべからむ連歌などして参らせよ（＝この場にふさわしい連歌などを詠んで献上せよ）」（第3段落5行目）と言われた時には、歌人として喜びを感じたであろうことは想像できるものの、「句を求められたことには喜びを感じていた」という様子のはっきりと描かれているわけではない。

④ 「管絃や和歌の催しだけでは後で批判されるだろうと考え」が誤り。これに相当しそうなものは、③で見た「後の人や、さらでもありぬべかりけることかなとや申さむ（＝後世の人が、『きつとそんなことはしなくてもよかつたことであるよ』と申すのではなからうか）」であるが、これは「良暹を船に乗せることが後々批判されるのではないか」という危惧であり、「管絃や和歌の催しだけでは後で批判されるだろう」と危ぶんでいるわけではない。連歌をすることになったのは、ある殿上人が「あれ、船に召して乗せて連歌などさせせむは、いかがあるべき（＝あの良暹を、船に呼び乗せなさって、連歌などをさせるような趣向は、どうだろうか）」と提案したことで、そのような流れになったのである。

⑤ 第3段落1～3行目の「『良暹がさぶらふか』と問ひければ、良暹、目もなく笑みて、平がりてさぶらひければ、かたはらに若き僧の侍りけるが知り、『さに侍り』と申しけれ（＝殿上人が）『良暹がおりますか』と尋ねたところ、良暹が、目を細めて笑って、平伏して控えていたので、側に若い僧がおりましたが、（その者がこれに）気づき、『さようでございます』と申し上げた」に相当していて誤りがない。よって、正解は⑤である。

正解

25

⑤

問4 本文と引用文を踏まえた教師・生徒の会話に関する空欄補充問題

次に示すのは、授業で本文を読んだ後の、話し合いの様子である。これを読んで、後の(i)～(iii)の問いに答えよ。

本文二つ、もしくは、本文と引用文を踏まえて考えさせる問題は「共通テスト」新傾向の問題。また、複数の人物(教師・生徒など)の会話に関する問題は、前年度に続いての出題である。

(i) 空欄 に入る発言として最も適当なものを選べ。

基礎

空欄の前に「この二つの句のつながりがわかった!」と書かれているので、 には、問4に引用されている『散木奇歌集』の連歌の解釈が入ることになる。

俊重の前句は「釣殿／の下／には／魚／や／すま／ざら／む」と単語分けされて、「釣殿の下には魚は住んでいないのだろうか」と訳される。「釣殿(つりどの)」「は」、「庭の池に突き出るように建てられている建物」のこと。「や」は、疑問(「か」)の係助詞。「すま」は、動詞「住む」の未然形。「ざら」は、打消の助動詞「ず」の未然形。「む」は、推量(「う」)の助動詞「む」の連体形(係助詞「や」による係り結びの結び)である。

各選択肢は、前半で俊重の前句を解釈しているが、右で見た解釈が正しく説明されているのは、④の「釣殿の下には魚が住んでいないのだろうか」だけである。これで正解は④に決まる。

俊頼の付句は、「うつばり／の／影／そこ／に見え／つつ」と単語分けされて、「(釣殿の)うつばり「||屋根を支える梁」ではないが、釣針の姿が水底に映って見え隠れする(からね)。」と訳される。「影」は、「姿・光」の意の名詞。「そこ」は、ここでは「水底(みなそこ)」のことである。

俊重が「釣殿・魚」と詠んだことに縁語的発想で「はり(釣針)」を持ち出していることや、「うつばり」に「はり(釣針)」を掛けていることは、解釈がやや難しいかも知れないが、④の説明を読めば納得はできるだろう。俊重の問いかけに対して、「はり(釣針)」を恐れて魚は釣殿の下には住まないのだよ」と説明しているのである。

よって、正解は④である。

正解 26 ④

(ii) 空欄 Y に入る発言として最も適当なものを選べ。

標準

空欄の前に「この句（＝良暹の「もみぢ葉の」の句）は」と書かれているので、Y には、良暹の「もみぢ葉の」の句の解釈が入ることになる。良暹の句は「もみぢ葉の／こがれ／見ゆる／御船／かな」と単語分けされて、「屋形の」紅葉が焦がれ「＝焦げるように色づき」、漕がれて行くのが見える（素晴らしい）御船であるよ。」と訳される。「こがれ（焦がれ）」は、「（火で）焦げる・（日で）色が変わる・（紅葉が）色づく」、もしくは、「恋い焦がれる」の意のラ行下二段活用動詞「こがる（焦がる）」の連用形。「かな」は、詠嘆（＝なあ・ことよ）の終助詞である。まずは、「焦がれ」に「紅葉が色づき」の意があることを知らなくてはならないが、ここでは「御船」も詠まれているので、「漕がれ」が掛けられていることにも気がつかなくてはならない。

選択肢で、「焦がれ」の意や、「漕がれ」と掛詞であることが説明されているのは①だけであるから、これで正解は①に決まる。

①以外の選択肢は、この説明がない点で十分な説明になっているとは言えない。また、②で説明されている「寛子への恋心」は本文には全く書かれておらず、③・④の説明は、可能性が全くない内容とも言えないが、本文の趣旨から離れており、そのような気持ちで良暹が「もみぢ葉の」句を詠んだという確証が得られない。

よって、正解は①である。

正解 27 ①

(iii) 空欄 Z に入る発言として最も適当なものを選べ。

標準

空欄の前に「4・5段落の状況もよくわかるよ」と書かれているので、Z には、第4・5段落に合致する内容が入ることになる。

①「良暹を指名した責任について殿上人たちの間で言い争いが始まり」が誤り。第5段落1～2行目に「かく言ひ沙汰する（＝このようにあれこれ言う）」とあるが、これは「付けてやみなむこと（＝付句を付けられずにそれきりになってしまうようなこと）」（第4段落4行目）や、「かきならす人もなくてやみにけり（＝楽器をかき鳴らす人もなくて弾かないままになってしまった）」（第5段落1行目）ことを、殿上人たちが互いに言い合っ

いるということであり、「良暹を指名した責任」について言い争ったということではない。

② 「自身の無能さを自覚させられ」や「取り仕切ることも不可能だと悟り」が言い過ぎ。殿上人たちは、良暹の句に対する付句が詠めず、「付けやみなむことを嘆く程に、何事も覚えずなりぬ（＝付句を付けられずにそれきりになってしまうようなことを嘆くうちに、（呆然として）何も考えられなくなってしまった）」（第4段落4～5行目）という状態になり、「このことにたがひて、皆逃げておのおの失せにけり（＝このことが思うように行かなかったことで（興もさめて）、皆逃げるようにそれぞれ立ち去ってしまった）」（第5段落2～3行目）のである。「無能さ」を自覚したとか、「取り仕切ることも不可能だ」と悟ったというほどのことまでを思ったり考えたりしたとは書かれていない。なお、第5段落の最後に「まうけしたりけれど、いたづらにてやみにけり（＝準備をしていたけれど、無駄になってそれきりになってしまった）」とあり、これが「取り仕切ることも不可能だと悟り」に相当しそうだが、これは「宮司」について書かれていることであり、「殿上人」について書かれていることではない。

③ 選択肢1行目の内容は、第4段落1～3行目の「付けむとしけるが遅かりければ（＝付句を詠もうとした遅かったので）」、「一めぐりの程に、付けて言はむとしけるに、え付けざりければ（＝一周するあいだに、句を付けて言おうとしたが、付られなかったので）」、「二めぐりになりけり。なほ、え付けざりければ（＝二周になってしまった。それでもなお、付けられなかったので）」などに相当しており、選択肢2行目の内容は、第4段落4～5行目の「今は、付けむの心はなくて、付けでやみなむことを嘆く程に、何事も覚えずなりぬ（＝今はもう、付句を詠もうという気もなくなって、付けられずにそれきりになってしまうようなことを嘆くうちに、呆然として何も考えられなくなってしまった）」や、第5段落2～3行目の「このことにたがひて、皆逃げておのおの失せにけり（＝このことが思うように行かなかったことで（興もさめて）、皆逃げるようにそれぞれ立ち去ってしまった）」に相当して、説明に誤りはない。

④ 「殿上人たちは念入りに船遊びの準備をしていた」、「連歌を始めたせいで予定の時間を大幅に超過し」、「殿上人たちの反省の場となった」が、いずれも正確とは言えない。まず、船遊びの準備を念入りにしていたのは、正確には「宮司」であり、「殿上人」ではない。また、時間を大幅に超過したのは、良暹の句に対して誰も付句を詠めなかったからであり、「連歌を始めたせい」ではない。さらに、殿上人たちは、「付けでやみなむことを嘆く（＝付けられずにそれきりになってしまうようなことを嘆く）」ことや、準備した楽器を弾かないままになってしまったことを「言ひ沙汰する（＝あれこれ言う）」ことはしているが、「反省」しているとは書かれていない。

よって、正解は③である。

正解

28

③

第4問 漢文

白居易 『白氏文集』

〔出典〕白居易『白氏文集』第四十六・策林二・二十七「族類を以て賢を求むるを請ふ」の一節

『白氏文集』は、中唐の大詩人白居易（七七二～八四六年）の詩文集。全七十一巻。白居易が自ら編集したもので、中国でも広く読まれ、日本にも平安時代に伝来し、『文選』とともに、貴族社会で愛読された。

白居易は、韓愈（七六八～八二四年）、柳宗元（七七三～八一九年）と並ぶ、中唐を代表する詩人であり、文章家でもある。字の楽天でも広く知られる。現存する詩は三千余首で、唐代の詩人の中でも最多である。玄宗皇帝と楊貴妃の愛をうたった長編詩「長恨歌」はとくに人気があり、『源氏物語』などにも大きな影響を与えた。

〔書き下し文〕

〔予想問題〕

問ふ、古より以来、君たる者其の賢を求むるを思はざるは無く、賢なる者其の用を効すを思はざるは罔し。然れども両つながら相遇はざるは、其の故は何ぞや。今之を求めんと欲するに、其の術は安くに在りや。

〔模擬答案〕

臣聞く、人君たる者其の賢を求むるを思はざるは無く、人臣たる者其の用を効すを思はざるは無しと。然り而して君は賢を求めんとして得ず、臣は用を効さんとして由無きは、豈に貴賤相懸たり、朝野相隔たり、堂は千里よりも遠く、門は九重よりも深きを以てならずや。

臣以為へらく、賢を求むるに術有り、賢を弁ずるに方有り。方術は、各其の族類を審らかにし、之をして推薦せしむるのみ。近く諸を諭へに取れば、其れ猶ほ線と矢のごときなり。線は針に因りて入り、矢は弦を待ちて発す。線矢有りと雖も、苟くも針弦無くんば、自ら致すを求むるも、得べからざるなり。夫れ必ず族類を以てするは、蓋し賢愚貫くこと有り、善悪倫有り、若し類を以て求むれば、必ず類を以て至ればなり。此れ亦た猶ほ水の湿に流れ、火の燥に就くがごとく、自然の理なり。

〔通釈〕

〔予想問題〕

問う。古代からこのかた、君主たる者で賢者を求めようと思わない者はなく、賢者で君主の役に立ちたいと思わない者はいない。それなのに双方が出会

わない、その理由はなぜか。(また)今(君主が)賢者を求めようとする、その方法はどこにあるのか(述べよ)。

【模擬答案】

私は(こう)聞いております。「人君たる者で賢者を求めようと思わない者はおらず、人臣たる者で君主の役に立とうと思わない者はいない」と。それなのに、君主が賢者を求めても得られず、臣下が君主の役に立とうとしてもその方法がないのは、身分の貴賤による壁があり、朝廷と民間の間に距離があり、君主の居所が千里よりも遠くはなれ、王城の門が九重よりも深くはなれているからではないでしょうか。(つまり、君主と臣下の間に大きな隔たりがあるがゆえに、双方が出会わないのです。)

私が考えますに、賢者を求めるには術策があり、賢者を弁別するには方法があります。その方法術策は、それぞれ(その人物の)同類(である人物)を詳しく調べ、その(同類たる)人物に賢者を推薦させることに尽きます。身近な例にたとえれば、それは糸と矢のようなものです。糸は針穴に入ってはじめて働き、矢は弦につがえてはじめて発せられます。たとえ糸や矢があっても、かりにも針と弦がなければ、それ自体を用いようとしても、できないのです。そもそも(人が)必ず同類に依るとするのは、思うに賢者同士、愚者同士は一貫して(通じ合って)おり、善人同士、悪人同士は仲間になり、もし同類を求めれば、必ず同類が集まるからです。これはまたあたかも水が湿った場所に流れ、火が乾燥した場所に向かって燃え広がるように、自然の理なのです。

【解説】

問1 語句の意味の問題

- (ア) 基礎 (イ) 基礎 (ウ) 標準

波線部(ア)「無_レ由」、(イ)「以_レ為」、(ウ)「弁」のここでの意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。

(ア)「無_レ由」は、下に「者(は)」があるので「よしなき(は)」と読む。「無」はすべての選択肢が共通して「…がない」であるから、ポイントは「由(よし)」の意味である。「よし」は、「理由・原因・わけ」「方法・手段」のどちらかで、選択肢としては①と③が残るが、ここは、【予想問題】の文中の「其の術」や、【模擬答案】の文中の「方有り」の「方」の意に近く、「方法がない」が妥当である。

(イ)「以_レ為」は「おもへらく」と読む重要語で、「思う(思った)ことには…(と)」の意。「以_レ為A(おもへらくAと)」で「思ったことにはA(だ)と」であるが、「以_レ為A(以てAと為す)」と読むこともでき、「A(だ)と思う」の意である。①の「考えるに」が正しい。

(ウ)「弁」は、文脈の中では、「賢を弁_ズるに方有り」で、「弁_ズ(サ変動詞)」と読む。「弁」という字は、元来「かんむり(冠)」の意で、旧字の

「辨」、「辯」、「辯」に分かれる。

「辨」…「わける。わかれる。分離する」「區別する。見わけける」「わきまえる」「明らかにする」「調べる」「治める。処理する」「ただす」「そなえる。準備する」

「瓣」…「瓜うりのなかご（種を含んだやわらかい部分）。瓜の種」「みかんなどの）果肉のふさ」「花卉。はなびら」

「辯」…「ことばでおさめる」「ただす。明らかにする」「説く。語る。たくみに言う」「言い争う。論争する」

①「弁償」、⑤「弁別」の弁は「辨」、②「弁護」、③「弁解」、④「弁論」の弁は「辯」である。ここでは、多くの人物の中から賢者を「見わけるといいう意味で、⑤の「弁別」が適当である。

正解 (ア) 29 ① (イ) 30 ① (ウ) 31 ⑤ (各4点)

問2 傍線部の解釈の問題 標準

傍線部A「君者無_レ不_レ思_レ求_二其_一賢、賢者罔_レ不_レ思_レ効_二其_一用」の解釈として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

「君たる者其の賢を求むるを思はざるは無く、賢なる者其の用を効すを思はざるは罔し」の解釈のポイントは、「無_レ不_レA（Aせざるはなし）」の二重否定の形である。後半部の「罔」は「無・莫・勿・毋」などと同じ「なし」。

「Aせざるはなし」で「Aしないものはない」と訳すから、傍線部は、直訳すると、「君主たる者で賢者を求めようと思わない者はなく、賢者で君主の役に立ちたいと思わない者はいない」となる。「用を効す」は「(自分の)能力を尽くす」「はたらきにつとめる」ということであるが、逆に、選択肢から、「役に立つ」の意と考えたい。

二重否定は、イコール強い肯定であるから、「君主たる者は誰も賢者を求めようと思っており、賢者は誰も君主の役に立ちたいと思っており」と訳してもよいわけで、正解は③になる。

正解 32 ③ (6点)

問3 返り点の付け方と書き下し文の組合せ問題 応用

傍線部B「豈不以貴賤相懸、朝野相隔、堂遠於千里、門深於九重」の返り点の付け方と書き下し文との組合せとして最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

この形式の問題は、「センター試験」時代から頻出する形式なのであるが、ポイントは、傍線部の中に、再読文字や、疑問・反語・否定・使役・受身などの何らかの句法上の読み方の特徴がないかということと、書き下し文のように読んだときの文意が通るか、また、その文意が前後の文脈にあてはまるかどうか、である。返り点は、本当はそのような返り方（付け方）が文の構成上アリなのか？ ということはあるのであるが、ともかく読み方どおり返っているようにしているケースがふつうなので、返り点の付け方をチェックするのは時間の無駄である。

句法上のポイントとしては、当然「豈（あに）」が目につくのであるが、選択肢を見ても、「豈に：んや」という典型的な反語形に読んでいるものがない。

別の可能性としては、「豈不_レA（哉）」で「あにA（セ・ナラ）ずや」と読み、「なんとAではないか」と訳す、詠嘆形が考えられ、これを考える、④・⑤が該当する。

また、「豈に」は、「：だろうか」と、不確定なことを推測したりする疑問の訳し方もある。

もう一つの着眼点は、「貴賤相懸たり」と「朝野相隔たり」が、「堂は千里よりも遠く」と「門は九重よりも深き」が、それぞれ「対句」であることである。つまり、この二つの対句は、正しく並べて読んでいなくてはならず、両方ともに正しく並べて読んでいるのは⑤のみである。③・④は前者のみ、①・②は後者のみが正しく、③・④は後者の読みに、①・②は前者の読みに崩れがある。

よって、正解は⑤。

- ① ○豈に貴賤相懸たるを_{あへた}×以てならずして、朝野相隔たり、○堂は千里より遠く、門は九重よりも深きや
- ② ○豈に貴賤相懸たり、朝野相隔たるを×以てならずして、○堂は千里より遠く、門は九重よりも深きや
- ③ ○豈に○貴賤相懸たり、朝野相隔たり、堂は千里よりも遠きを×以てならずして、門は九重よりも深きや
- ④ ○豈に○貴賤相懸たり、朝野相隔たり、堂は千里よりも遠き×を以て、門は九重よりも深から○ずや
- ⑤ ○豈に○貴賤相懸たり、朝野相隔たり、○堂は千里よりも遠く、門は九重よりも深きを以てなら○ずや

解釈は、「身分の貴賤による壁があり、朝廷と民間の間に距離があり、君主の居所が千里よりも遠くはなれ、王城の門が九重よりも深くはなれているからではないだろうか」と、疑問の形になる。詠嘆の訳し方もできなくはない。

正解 33 ⑤ (7点)

問4 比喩にかかわる内容説明の問題 標準

傍線部C「其猶線与矢也」の比喩は、「線」「矢」のどのような点に着目して用いられているのか。最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

「其れ猶ほ線と矢のごときなり」そのものは、「それはあたかも糸と矢のようなものである」という意味であるが、「線」と「矢」の「どのよう

な点に着目して用いられている」かは、傍線部の直後に述べられている。

「線は針に因りて入り、矢は弦を待ちて発す（＝糸は針の穴に入つてはじめて働き、矢は弓の弦につがえてはじめて発せられる）」、つまり、糸は、針の穴に通されてはじめて布をぬったりすることができ、矢は弓の弦につがえられてはじめて前方へ放つことができるのである。さらに、「線矢有り」と雖も、苟くも針弦無くんば、自ら致すを求むるも、得べからざるなり（＝たとえ糸や矢があつても、かりにも針と弦がなければ、それ自体用いようとしても、できないのである）」と言う。糸や矢そのものは、そのままでは用いようがない、針や弦があつてはじめて用いることができる、ということである。よって、正解は①。

正解 34 ① (6点)

問5 空欄補入と書き下し文の組合せ問題 応用

傍線部D「X以類至」について、(a)空欄Xに入る語と、(b)書き下し文との組合せとして最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

傍線部に至るまでの文脈を少し前から見てみる。

「賢者」を「弁別する」方法として、筆者は、「其の族類を審らかにし、之をして推薦せしむるのみ」と言っているが、なぜ「必ず族類を以てする」のかというと、「賢愚貫くこと有り、善悪倫有り（＝賢者は賢者同士、愚者は愚者同士、そのくつつきかたは一貫しており、善人は善人同士、悪人は悪人同士、類は友を呼んで仲間になる）」からである。

それゆえ、「若し類を以て求むれば（＝もし同類の者を求めれば）」、「X」以類至」と文は流れている。ここまでの流れでいえば、「同類の者は必ず集まる」ということではなくてはならない。

各選択肢(b)の書き下し文による意味をチェックしてみる。

- ① 「同類を以てしないでやってくるからである」
 - ② 「どうして同類を以てやってくるであろうか（いや、やってこない）」
 - ③ 「必ず同類を以てやってくるからである」
 - ④ 「誰が同類を以てやってくるであろうか（いや、やってこない）」
 - ⑤ 「かつて同類を以てやってきたからである」
- 文脈にあてはまるのは、③である。①・②・④・⑤は……点部がキズ。

正解 35 ③ (5点)

問6 傍線部の内容説明問題 標準

傍線部E「自然之理也」はどういう意味を表しているのか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

ここは、直前部の「此れ亦た猶ほ水の湿に流れ、火の燥に就くごとく」に着眼する。

「此れ」は、さらにその前の、「類を以て」求めれば必ず「類を以て」集まること、つまり、人間は、賢者は賢者同士、愚者は愚者同士、善人は善人同士、悪人は悪人同士、「類は友を呼ぶ」ということである。

それは、「水の湿に流れ、火の燥に就く」ようなものである。水は湿ったところに流れ、火は乾燥したほうに燃え広がる。このたとえが正しくそのまま述べられているという点だけでも、正解は④である。

問7 問題文全体にかかわる内容合致問題 応用

- ① ×水と火の性質は反対だがそれぞれ有用であるように、×相反する性質のものであってもおのおの有効に作用するのが自然であるということ。
- ② ×水の湿り気と火の乾燥とが互いに打ち消し合うように、×性質の違う二つのものは相互に干渉してしまふのが自然であるということ。
- ③ ×川の流れが湿地を作り山火事で土地が乾燥するように、×性質の似通ったものはそれぞれに大きな作用を生み出すのが自然であるということ。
- ④ ○水は湿ったところに流れ、火は乾燥したところへと広がるように、○性質を同じくするものは互いに求め合うのが自然であるということ。
- ⑤ ×水の潤いや火による乾燥が恵みにも害にもなるように、どのような性質のものにも×それぞれ長所と短所があるのが自然であるということ。

正解 36 ④ (6点)

【予想問題】に対して、作者が【模擬答案】で述べた答えはどのような内容であったのか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

- 選択肢の形を見てもわかるが、【予想問題】のポイントは二点ある。
1. 賢者を求めているはずの君主が賢者と出会わないのはなぜか。
 2. 賢者を求めるには、どのような方策があるか。
- 1のポイントに対する解答は、【模擬答案】の第一段落にある。

それは、傍線部Bの内容で、問3で読み方の答は出ているのであるが、「身分の貴賤による壁があり、朝廷と民間の間に距離があり、君主の居所が千里よりも遠くはなれ、王城の門が九重よりも深くはなれているからではないだろうか」という意味である。つまり、君主が宮廷深くにいて、賢者がいるかもしれない世界と隔たっているために、賢者に出会わないのだということである。

この第一段落のあとには省略があり、「臣に懐懐の誠有り」と雖も、何に由りて上達せん。君に孜孜の念有りと雖も、下知するに因無し。上下茫然とし、兩つながら相遇はず（たとえ臣下の側に恭しく仕える誠意があっても、それをどうやって上に伝達できようか。また、たとえ君主の側に真摯に求める念願があっても、下に知らせる方法がない。上下が遠くはなれてはつきり見えず、双方が出会えない）と言っている。むしろ、省略されているのであるから、ここまでの言を考へることはできないが、与えられている第一段落の読解だけでも判断はできよう。

2のポイントに対する解答は、【模擬答案】の第二段落にあり、ポイントは、「各^{おの}の族類を審^{つまひ}らかにし、之^{これ}をして推薦せしむるのみ（＝それぞれその人物の同類の人物を詳しく調べ、その人物に賢者を推薦させることに尽きる）」である。

- ① 君主が賢者と出会わないのは、×君主が賢者を採用する機会が少ないためであり、賢者を求めるには×採用試験をより多く実施することによって人材を多く確保し、その中から賢者を探し出すべきである。
- ② 君主が賢者と出会わないのは、×君主と賢者の心が離れているためであり、賢者を求めるにはまず×君主の考えを広く伝えて、賢者との心理的距離を縮めたうえで人材を採用するべきである。
- ③ 君主が賢者と出会わないのは、×君主が人材を見分けられないためであり、賢者を求めるには×その賢者が党派に加わらず、自分の信念を貫いているかどうかを見分けるべきである。
- ④ 君主が賢者と出会わないのは、○君主が賢者を見つけ出すことができなためであり、賢者を求めるには○賢者のグループを見極めたうえで、その中から人材を推挙してもらうべきである。
- ⑤ 君主が賢者と出会わないのは、×君主が賢者を受け入れないためであり、賢者を求めるには×幾重にも重なっている王城の門を開放して、やって来る人々を広く受け入れるべきである。

正解

37

④

(8点)